

自然賛歌

海山岸を歩く

(串戸港から阿品海岸まで)

妹尾 汎 伯 人

「さくらお」一一九号の海岸観察(佐方川可愛川)に続いて、今回は串戸港から阿品までの海岸線を観察した。

前回の終点、広島南岸道路の「榎の浦大橋を渡り西に向う。やがて道は尽きて、そこに嘉永橋がある。(この橋は、廿日市市下水道浄化センター行き専用橋で一般の人は通れない)突き当たりは背丈より高い防潮堤で、その交差点を右折して嘉永橋の下を通り、国道二号線まで行く。左が高い防潮堤で囲まれた串戸港である。二号線に出て、左折し国道沿いに進んだ、串戸港の西端に、手動の排水調整バルブの備わった小さな調整池がある。この小さな調整池の水路は、国道の下を暗渠で横切つて、北へ向かつており、国道脇のクリークから流れ出る雨水を受け、クリークは、その昔の弘法川の雨水を受けている。

串戸港は、干潮時には干上がつてしまい、船の出入が困難ということもあつて、今ではあまり利用されていないようだ。その串戸港をぐるりと一廻りして、海岸に向う。

高い防潮堤上に作られたコンクリート道を進む。左は串戸港の進入水路、右は、嘉永新開(串戸一丁目)で、防潮堤上から見ると嘉永新開の地面は五並下にある。そこにはウツドワン(住建産業)など工場群が建つていて、防潮堤の新開側は、コンクリートのスロープで、その最下部と新開地との間に幅六並から三並のクリークが長々とあり、これを「汐回し」と呼び、調整池である。

防潮堤の地先には、また広い造成地があり、下水道浄化センターがある。関連の建物が見

える。この造成地は、広い草原となつており、雲雀(兵)の楽園となつている。

この場所を、将来的には、野鳥のサンクチュアリー(鳥の場所)としたいものである。

堤防上を西に進むと、御手洗川の河口に突き当たる。御手洗川は、野見原山(七一九・五並)を源流としている。

国道二号線に架かる藤掛橋が、併設の歩道橋と共に、御手洗川最後の橋である。川を下流に向かつて行くと、海に降りるスロープがある。

そのスロープから海岸の砂浜に降りてみた。そこには、河口から五〇〇並位の沖まで、とてもなく広い干潟が現れる。干潟には、数百人程の人たちが潮干狩を楽しんでいた。

私も、辺りの砂浜を掘つて見ると、あさり目がたくさん出た。あさり目の他には、数は少ないが、また貝、大貝、さかまき貝もいた。何処を掘つてもあさりが出て来る訳ではない、目にも生息圏や条件があるらしい。このことを潮干狩りの人たちは、よく知っている。

よう、人のいない場所には貝もいない。いそがに・ちごがには、何処にでもいるようだが、人の気配で、素早く自分の穴に潜りこんでしまう。潜り込んだら暫くは出てこない。出口と入口が違うのかも知れない。

干潟の生き物を観察していると、何時も面白い出会いがある。

御手洗川河口の水鳥は、八幡川の水鳥より種類も数も多いと云われている。しかしあまりにも干潟が広く、また潮の加減で鳥が移動するので、ここは観測には不都合だ。そこで、こちらから、波打ち際まで出て見ると、沢山の水鳥が遊泳しているのが分かった。

ふと気づくと干潟に、可愛川河口では見かけなかった頭黒カモメが、私のすぐ近くまで数十羽が群をなしてやって来て、潮干狩で掘

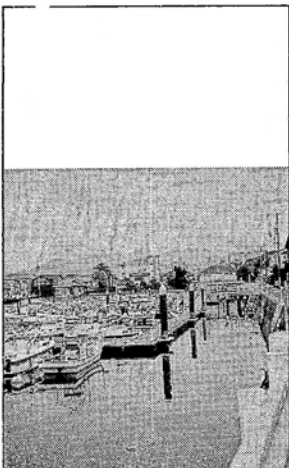
り返された場所の餌をついばんでいた。

あさり目を少し頂いて、干潟から引き返して堤防上がって見ると、潮干狩りにやって来た車が、一〇台近く駐車している。御手洗川左岸にも車がいっぱいだ。右岸には、駐車禁止の標識があるが、遠慮なく止めてある。そこで、標識をよく見ると「日・休日は除く」とある。廿日市警察の粋な計らいだと思つた。車が駐車している堤防上の道路を西に向かう。この辺り地御前一丁目。

また堤防右下にクリーク(汐回し)が見えて来た辺りで、左に一段下った土地があるが降りる道が見当たらない。程なく道は見つかり海辺に出た。この辺りは地御前五丁目で牡蠣打場の建物が並んでいる。この辺り一帯、牡蠣養殖に必要な材料の、孟宗竹の山、帆立貝の貝殻、鋼線、スチロール製の浮き、鉄製格子状籠、等々所狭しとばかり、家の外に雑然と積みあげられている。

そこから牡蠣水揚げ用のクレーンの並ぶ、地御前港の岸壁に出る。

港内には等間隔に直径三〇並位のコンクリートパイプが杭として二四本、つき立てられ、この杭を利用して港内に三列、浮き棧橋が一応に陸地側から外海方向に向かつて並び、それぞれに漁船・牡蠣作業船・プレジャーボートが係留されている。地御前港はよく整備され、漁港として完全に機能化されている。



地御前港

地御前魚協の横から、二号線に出る手前の道を、漁港を左に見ながら、宮島方向に進む。家が途切れて二号線が見えた所で、左に折れる。丁度、漁港の角だが、そこから外海方向に進むと、一〇級の船が陸揚げされていた。そのクレーンにISUZUマリーエンジンの表示がある。なお、そこに船を引き上げるスロープはあるが、付近に工場らしき建物もなく、船を修理する設備もないことから、多分、船底をたてるために陸揚げしているものと解釈して、そこを通り過ぎた。

道が右へ折れ、漁港を後にする。左にまたも牡蠣打場、その先に防波堤がある。道は、また右に曲がり、二号線に出る。

地御前神社を右に見ながら宮島方向に向かう。右は広電宮島線が並行し、左はすぐ海で家並が尽きている。

二号線が、少し上り坂になるあたりで海側に折れる道がある。そこに看板があり、「楽しいお買い物は、フジグランナタリ、次の信号左折」とある。通称「スーパーふじ」の案内板だが、「次の信号左折」の文字が如何にも小さ過ぎる。近寄って見なければ読めない。自動車への案内板だろうが、これでは見落とすて終うと思う。

その看板のところ左に曲がってみた。すぐに右へ折れ、下りのだらだら坂となり、突き当りを左へ曲がると、七・八分で海へ出た。そこに小さな砂浜があり、カモが遊んでいた。そこには牡蠣養殖用ひびが一〇列程並んでいた。実に静かで、聞こえる音は、さざ波の打ち寄せる音だけである。

静かと言え、先ほど、だらだら坂を下ってこゝまで、一〇軒あった牡蠣打場の建物の内、九軒が無人、まるでゴーストタウンで、気味悪いほどの場所に成り果て、いる。

道は、行き止りのため、もと来た道をとって返して二号線に出た。

二号線のり坂を進むと、信号機手前に海岸に出る道があるので、入って見た。すぐ海岸にでた。しかし道路は高台の上を走っている。岸壁の高さは五メートルはあるだろう。

狭い土地に、それも崖に建つ家々。どの家も極めてモダンで、新築である。しかも全部東向きに階段状に建っている。また東の方角が全面海で、眺望を遮るものがない。宮島は右端に見えるが、前方から左方面には近くに島影もない。遠く能美島、似島が霞んで見える。

風光明媚なこの地を「沖山」と最近まで呼んでいたようだが、地御前の渡辺通氏(故人)によると、『拝床山または灰床山(シトギ)』、この地は地御前海岸線、約四kmのほゞ中央部にある。高さ約八〇m前後、海側は傾斜角度約三〇度の風化した岩山である。北側には「沖山」という急角度の瘤山が連なり、山裾には暗礁が多く、要害の地である」とある。(きんぎょ二巻II毛利元就の厳島合戦より)

沖山地区を一廻りしたら二号線にでた。二号線の信号のところ、左に曲がり、坂道を下る。下り切ると緩やかに道はカーブする。道が海岸に出た左側に、広島工業大学ヨット部の艇庫があった。岸壁に約五ト吊りのトンボクレーンがあったが、人はいない。

こゝにも寂しさが漂う。艇庫の建物の妻面に「鶴学園ヨット艇庫体育台宿所」と書いてあった。

そこから海岸線に沿って宮島口方面に向かう。右には広電宮島線が並行して走っている。艇庫から一〇〇位の所、道路右側の歩道の縁石に沿って「火立岩跡」(ホモイラト)の標識がある。天文二四年(一五五五)厳島合戦

の際、毛利軍が夜陰に乗じて包が浦に渡ったその時こゝから乗船、出発したという。なお標識には「平成九年三月吉日建立 廿日市市観光協会 廿日市市郷土文化研究会」とあった。

こゝから「お上り場公園」迄の浜は、「鱸浜」(ササマ)と呼ばれ、以前、鱸漁が盛んに行われた。このことについては、地元元長門太郎氏が今年二月に「そうらんば鱸浜の昔話 残したい話」と題して冊子を発行されている。「お上り場公園」は明治一八年、明治天皇が厳島からこの場所に上がられたことにより名付けられた。記念碑が建てられている。

公園から西は、元ナタリーの跡地で、現在フジグラン(平成一一年七月一〇日開店)と沢山のマンションが建てられている。

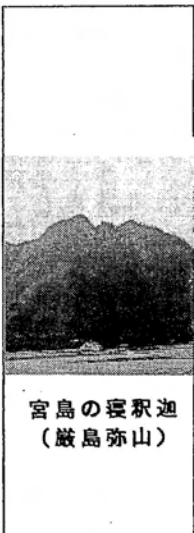
フジグラン西詰めから左に進むと阿品海岸に出る。こゝからの眺めが素晴らしい。指呼の間に厳島があり、東に安芸の小富士(似の島)を望み、廿日市市一番の眺めだ。

新年の日の出には、カメラの放列が出来る。この阿品海岸は、約五〇〇年で、その先は大野町となる。宮島競艇場が見える。

串戸港から阿品海岸まで約五〇〇で、海浜の自然と、港の様子を見させて貰ったが、廿日市市の海岸は全て人工の護岸で、自然の儘の海岸は見る事が出来なかつた。

波しずか寝釈迦の島を指呼にみる。

(自然観察指導員)



釈迦の島 (寝釈迦の島)
宮島 (厳島)